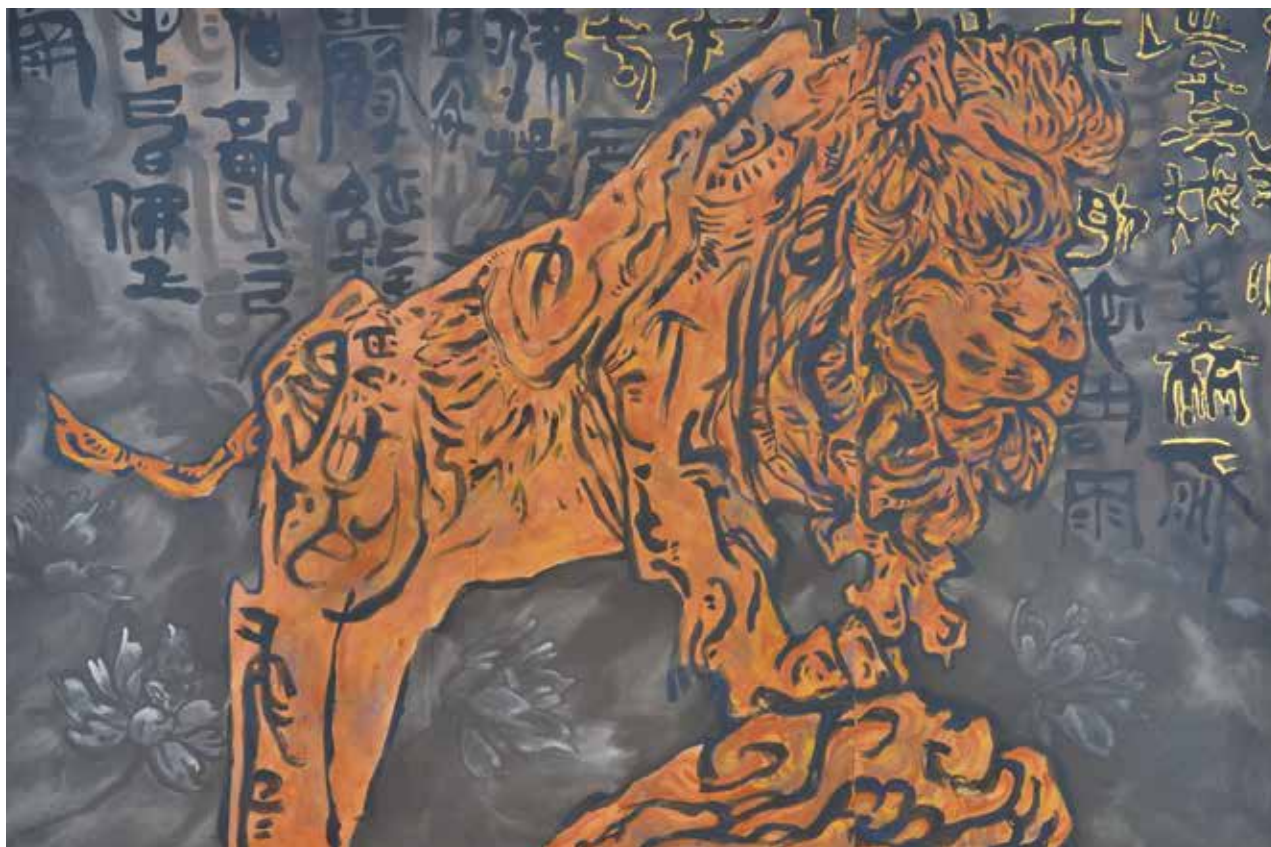


## 趙 沢倫

ZHAO, Zelun

### 岩絵具による暈染の可能性

The possibilities of mineral pigment though scumble



華嚴智賢

The wisdom and virtue of the Avatamsaka Sutra scripture

墨、岩絵具、金箔 / 宣紙

Ink, mineral pigments, gold leaf on rice paper

192 × 226 × 2.5 cm / 2 点 (2 pieces)

日本画には、一枚の絵を完成するために、多くの技法が存在している。その中に、とくに明治の日本画でよく用いられた「暈染」と言う概念ないし技法がある。長い時間のなかで使われているこの技法は、現代日本画においては昔の使い方だけではなく、新しい使い方が試みられており、それは中国や日本に大事でなく広く世界に及んでいる。ただ、暈染は様々な数ある技法の中では、主要なものとは言えな

い。一方で、とりわけ現代では岩絵の具を使って暈染技法を実践する画家が増えてきていることもまた否定しがたい事実である。このテーマは、暈染という技法をまとめて紹介し、その将来の新たな使い方の可能性について考察したい。



# 張 明檄

ZHANG, Mingxi

## 絵画における女性の内面

The female interior in painting



その日の彼女

Someday for her

岩絵具、アクリル絵具、パステル / 和紙

Mineral pigments, acrylic, pastel on Japanese paper

133cm × 100cm





私は家庭で、幼いころから多くの重大な環境の変化を経験してきたので、精神上的プレッシャーに同年代の人々よりいっそう敏感である。そんな私にとって、家庭と社会の重圧から解放される唯一の方法は絵画であった。そして、自分の生まれ育った家庭を離れてからようやく、冷静に自分の少年時代と自分が絵画を教えてもらった時から独立して創作するまでの軌跡を振り返る機会を得たのである。自分が受けてきた教育と社会環境が自分の性格と芸術創作にいかに深刻

な影響と傷を与えているかに気付いたのだ。そこには、私の個人的な家庭環境の影響もあるが、日本に留学して初めて気付いた中国社会の持つ歪みこそが大きな要因である。

社会の中で、私個人としての力は非常に小さなものかもしれない。しかし、自分の創作を通して、自分の経験や思考によって、少しでも人々を現在の社会の見直しに向かわせることができれば幸いである。



# 野口 雅未

NOGUCHI, Masami

## 人間を描くこと、永遠を表現すること

Drawing the human being , creating eternity



終わりのなき行進曲

The endless march

岩絵具、水干絵具 / 銀和紙

Mineral pigments, dyed mud pigments on silver-Japanese paper

159cm × 274cm



人間とは相反する性質を持つ、恐ろしく破綻した生き物である。うつろいゆく存在でしかないのに、常に永遠を求めている。どんどんと書きされていく自我にいつも怯える。存在しない「変わることのない自分」がほしい。唯一無二の存在になりたい。みんながそう思っている。だからこそ多くのものを生み出してきたのだろう。

人間の美は、精神性や物質性に潜むエネルギーであるというのが今のところ私の結論である。エネルギーははるか

昔に無から全てのものを生み出した。ならばこの脈々と受け継がれているエネルギーが途絶える時まで、美は消滅することはないはずである。

修了制作では、希望の象徴として音楽隊を描きたいと思った。滅びゆく世界から動物たちを導いていく音楽隊、それは絵空事かもしれない。だけど人間の想像力には可能性があるかと私は信じている。



## 濱田 祐

HAMADA, Tasuku

### 自作における写真と絵画の関係性について

The relationship between painting and photography in my own works

日常の中で、ふと愛おしいと感じる瞬間に出会う。それは、テーブルに落ちる影や、道のつきあたりの一軒の家、ガラスに映る人影などの一瞬のアングルとの出会いである。世界を愛おしいと思う瞬間は、昼夜・場所を問わず唐突に私の前に現れる。日々をなんとなく過ごしている人間が、日常の中でふと美に出会うこと。それはきっと、人が急ぎ足で街を歩く間に一度立ち止まりゆっくり深呼吸をし、辺りを見回すこ

とが出来れば気づくようなささやかなものだ。

世界との出会いの瞬間は、すべての人々の日常の中に潜んでいると考えている。さらに言うなら、私の制作とはそのような瞬間を凝結させ作品として提示することなのである。すなわち、出会いという小さな幸せが日常にはこんなに多くも存在しているということの啓蒙である。



1:58 (部分)



1:58

膠、岩絵具、アクリル絵具 / キャンバス / Glue, mineral pigments, acrylic on canvas  
273cm × 182cm



---

## 絵画専攻

日本画領域

油画領域

版画領域

---

### Painting Course

Japanese Painting

Oil Painting

Printmaking

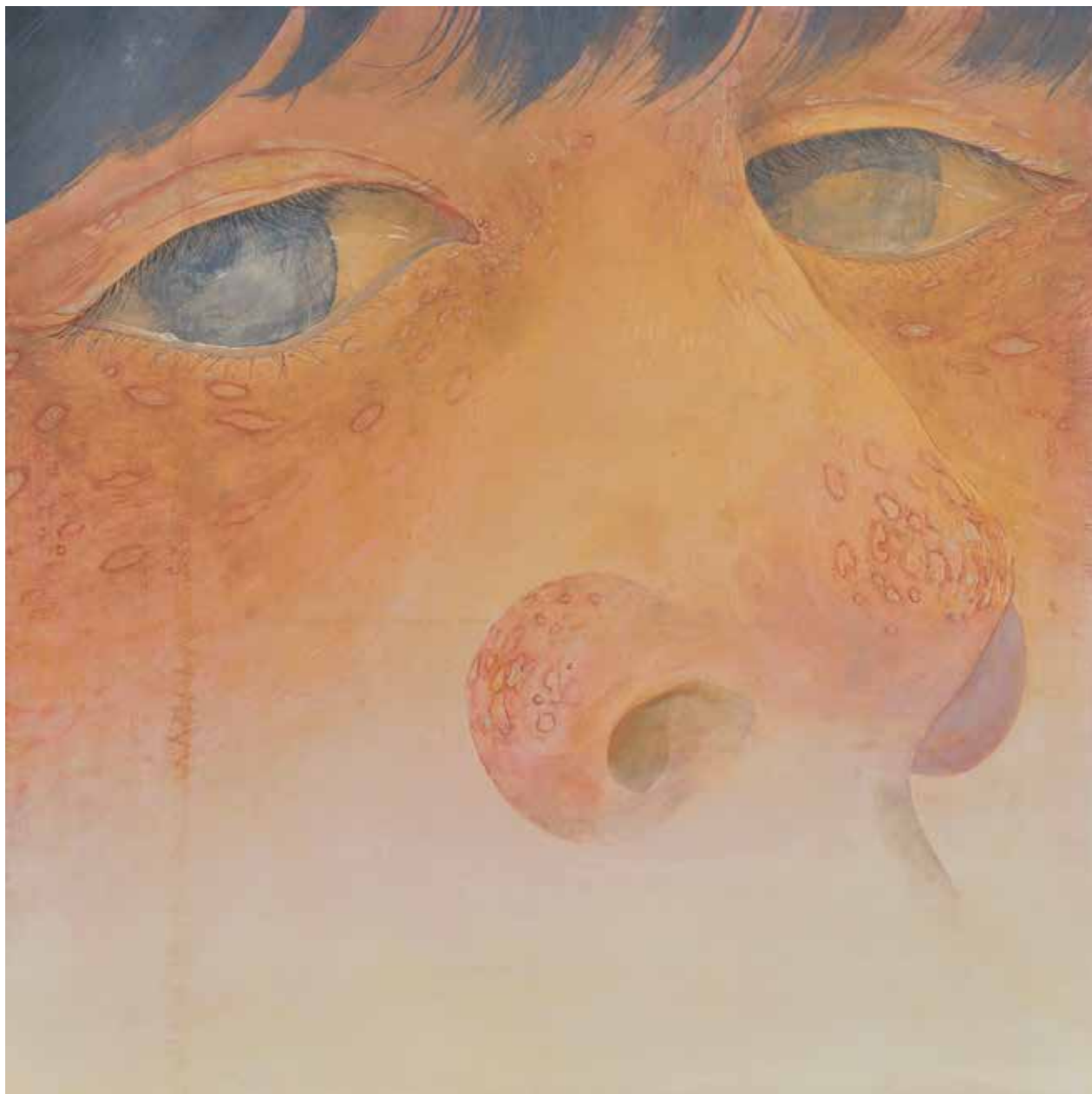
---

## 坡山 海香

HAYAMA, Umika

### 絵画作品と言語表現

Painting and language expression



あの熱の匂いを覚えているの? (このまま何も変わらずに生きるの?) / Do you still remember the smell of heat? (Will you live as it is?)

岩絵具、金属泥 / リネン / Mineral pigments, metal powder on linen

164 × 164 × 4cm

私が描く、大きくトリミングされた顔らは決して自画像ではなく、また特定の誰であるかは自分でも見当がつかないし、そこまで重要でもないだろう。描き始める前と完成するまでの最中に、絵画に対して具体的な背景や特別な情緒を含ませることも無いから、タイトルは後付けするしかなかった。肌は、表現の良し悪しはさておき、観た人の印象にな

るべく残るように、わざと汚く描いた。

完成した絵と対面したとき、不意になぜか自分の情けない部分を俯瞰してしまった。結局、18の頃から再三言われてきた悪い癖は治らないままだった。画面にもそれが嫌になるくらい滲み出ている。それにその画面に描かれた誰かは、概ね私を把握しているようだ。



何となく日々を過ごしていたの? (そうして最期は何を手に入れるの?) / Somehow you were living every day? (What do you get in the end?)

岩絵具、金属泥 / リネン / Mineral pigments, metal powder on linen

164 × 164 × 4cm



# 堀口 慎吾

HORIGUCHI, Shingo

## 絵画表現におけるノイズと揺らぐテクスチャ

Noise and vacillating texture in painting expression

膠、乾性油、顔料、銀箔、長谷川紙、シルクスクリーン、アクリルメディウム / 綿布  
Glue, linseed oil, pigments, silver foil, Hasegawa paper, screen printing, acrylic medium on cotton canvas  
162 × 130.3 × 3cm / 7 点 (7 pieces)



The field and daylight II



The field and daylight III



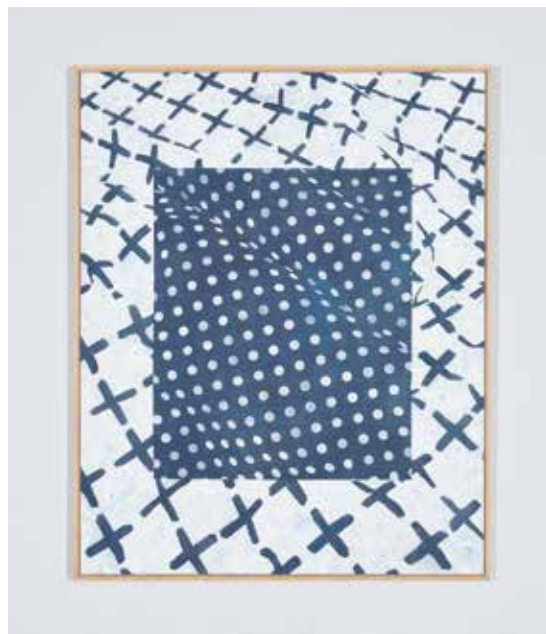
The field and daylight IV

画面に近づいた時と離れた時で鑑賞者の視覚的な印象に“揺らぎ”が生じるような絵肌を作るということは現在の私が作品を作る上で重要なテーマである。10代の頃、毎日のように聴いていたシューゲイザーというノイズミュージックによって自分の根底で育っていった“ノイズ”にたいする美意識を自分の専攻する日本画領域の素材を用いて体現したい。音楽と異なり、時間という概念を持たない絵画というメディ

アにおいてノイズ（つまり音のゆらぎ）を実現するために、作品を遠くから見た時の印象と近くから見た時の印象にズレを作り出す。鑑賞者に作品が展示される空間内で、作品の前での前後の振幅運動を促すことで絵画に時間的な概念を与えることが出来るのではないか。以下の作品群はこの仮説を元に制作されたものである。



The field and daylight V



The field and daylight VI



The field and daylight VII



The field and daylight VIII

## 松本 啓希

MATSUMOTO, Hiroki

### 川端龍子とデューラーにおける自然美と私の作品—作品を創るということ—

Considering natural beauty in the works of Ryūsei Kawabata and Dürer and my own works — creating artworks

自然的な神秘性やそのものにしかないもの。自分自身が  
感じる事が出来た印象を研究していくことを通して解釈し  
表現していきたい。それが、自身の表現と結びつき独自の  
ものとなっていくことを期待している。「作品を創るというこ  
と」を意識し制作していきたい。



生命の痕跡(部分) / Traces of life





生命の痕跡 / Traces of life  
日本画材 / 寒冷紗  
Japanese painting materials on cheesecloth  
193 × 130 × 3cm

# 宮崎 光男

MIYAZAKI, Mitsuo

## 赤いは、赤いだけでは無い

抽象的表現によって誘発されるコミュニケーションの可能性

Red is not just red

Possibilities of communication induced through abstract imagery

鑑賞者と作品間のコミュニケーションは鑑賞者によって能動的に発生している。絵画は物体であり、コミュニケーションは物体だけでは存在しえない為だ。しかし、作品の正体が判明すると、鑑賞者の中で行われていた能動的なコミュニケーションは受動的なものへと変わり、用意されていた作

者の意思と少なからず迎合してしまう。私は、自我が迎合される前の無意識に注目し、鑑賞者が能動的で自由なコミュニケーションを体験することのできる作品を、「多様性の自覚」を可能にする作品として研究対象とした。



**Atmosphere**

岩絵具、アクリル絵具 / 和紙

Mineral pigments, acrylic on paper

162 × 130 cm



**Atmosphere**

岩絵具、アクリル絵具 / 和紙

Mineral pigments, acrylic on paper

130 × 130 cm



**Atmosphere**

岩絵具、アクリル絵具 / ペニヤ板

Mineral pigments, acrylic on board

227.5 × 182 cm



# 山本 堯之

YAMAMOTO, Takayuki

## 人間と動物の関係性に見るアニミズムの消失

The disappearance of Animism as seen in human-animal relationships



象図#1 / Elephant#1

岩絵具、水干絵具、顔料 / 綿布

Mineral pigments, dyed mud pigments, pigments on cotton cloth

182 × 410 cm

古来より人間は動物という存在を聖なるもの、神なるものとして接する一方で「畏怖の念」や「死の恐怖」の象徴として恐れてきた。それは「アニミズム」と言われる概念に通じるものだ。だがしかし、現代で動物は動物園で鑑賞の対象となり、愛玩動物として家族の一員となり私たちは「畏怖の念」といった緊張感を持って接することはなく、ただ弛緩

した友愛性を持つのみである。

こうした現代で私は動物という存在に、命の美しさや野生の持つ鋭さ、暴力性を見出し制作している。私は自分だけの動物への「畏怖の念」とも言える感情を描き出そうと日々模索を続けている。



# 湯原 理紗

YUHARA, Risa

## 絵画における群集の表現

The expression of crowds in painting



A Familiar city

岩絵具、水干絵具 / 吉祥麻紙

Mineral pigments, dyed mud pigments on paper

130 × 194 × 3 cm



大学院に入ってから二年間、私は人の集団に強い関心を持ち、作品の中で取り上げてきた。人は、様々な情報によって動かされ、人と協力しあうことも対立しあうこともある。

人の集団は時に大きな力を持ち、「群集心理」と呼ばれる特殊な心理を醸成する。現代ではテレビ・新聞・インターネット等の群集心理の醸成に大きな影響を与え、時に過激な出来事を引き起こすこともあった。

しかし、それでも「群集」は個人が社会で生きていく上

で必ず向き合っていかなければならないものだ。群集の過激さのみを取り上げるだけではなく、その群集を構成する個人の持つ愛嬌を抽出し、表現していきたいと考えている。群集が持つ陰陽の両面を表現する為に、私は人をペンギンに見立て、街の様子等を描いた作品を制作している。

この論文を通して、私は自身の制作と「個と集団」というテーマについて、自身の制作に取り入れているモチーフ、歴史的作品との関係性などを取り上げて論じた。



**Nonexistent city**

岩絵具、水干絵具 / 吉祥麻紙

Mineral pigments, dyed mud pigments on paper

130 × 194 × 3 cm

## 劉 玉書

LIU, Yushu

### 絵画の中の時間性について

Time in the painting

日本画で使われる材料を使用し始めた頃から、岩絵具の独特な粒子のある質感は時間性を孕みながら、私にとっては魅力的なものであった。私の日本画作品の彩りがまだらであるのは、現代の絵画でありながら、まるで剥落したように時代性を感じられる表情になるよう工夫した結果である。

たとえば、古い壁画の剥がれ落ちた部分、色が淡くなった壁。古代の青銅器が時間の経過につれて侵食され残したボロボロな痕跡など、これらすべてが人の歴史を暗示させるものであるが、私の作品もそのような表情を持ったものでありたい願っている。

修了作品のモチーフは睡蓮である。以前の作品は短い一瞬を表現しているのに対し、今回の作品は長い時間を表現している。時間や環境という観点から、一年を通して変化する睡蓮のさまざまな姿を組み合わせ、一つの作品として表現したいと思う。



睡蓮 / Nenuphar

岩絵具、金箔、銀箔 / 麻紙

Mineral pigments, gold leaf, silver leaf on Japanese paper

194 × 97 × 3 cm







## ROZNOWICZ, Anika Magdalena

### アニメスタイルの存在の問題とそのスタイルの特性

Discussing the existence of anime style and identifying its characteristics



甘い / Sweet

岩絵具、水干絵具、色鉛筆 / 和紙 / Mineral pigments, dyed mud pigments, coloured pencils on Japanese paper / 364 × 162 cm



色々な辛いことを経験すると、人間は強くなるとよく言われています。しかし、一息つく暇もないと、その強さを発揮できません。今作品で、日常の苦勞から休める場所を描きました。実際にある場所でなく、夢として私達の頭の中に存在し、いつでも逃げられる所です。瞬間でもそこに沈んで、精力を集めると、また現実に向かいあえます。

子供の頃の私が『セーラームーン』を大好きだった理由は、当時放送していた他のアニメーションより、女性のキャラクターが人間らしいことでした。そのため、私にとって日

本のアニメのような描き方は女性の力を表現する意味があります。

私は作品で女性の個性を大事にするので、1980年代日本に普及したかわいい文化の影響で、女性らしく、かわいく、飾りが多く、美しさを追求し、それに応えたアニメスタイルは、日本から離れたポーランドに住んでいても、若い頃から私の絵の大切な要素です。伝統的な技法と大衆文化で生まれた描き方を混ぜながら、私にとって重要な話題と感情を表現します。

